

「私的戦闘訓練」 何が悪いのか



昨年の十二月二十六日から三十日まで、現役の自衛官十数人を迎えて、私が主宰する三重県の施設

「熊野飛鳥むすびの里」で自衛官合宿を実施しました。私が所属していたような特殊部隊ではなく一般部隊の人たちが、自らの技能を高めたいと参加したのです。このようなまじめな自衛官に、OBとして支援することが、国防に携わった者としての責務であると考え

ます。

合宿のほぼ全期間にわたって、共同通信の石井暁・編集委員が、むすびの里から百メートルほど離れた川の対岸の私有地で、ドーンとカメラを構えて私たちの様子を撮影していました。そして一月二十三日、共同通信は「自衛官に私的戦闘訓練 特殊部隊元トップが指導 法抵触か、過激思想も」と題する石井記者の署名記事を配信

したのです。それは以下のような書き出しでした。

「陸上自衛隊特殊部隊のトップだったOBが毎年、現役自衛官、予備自衛官を募り、三重県で私的に戦闘訓練を指導していたことが23日、関係者の証言などで分かった。訓練は昨年12月にも開催。現地取材で実際の訓練は確認できなかったが、参加者が迷彩の戦闘服を着用しOBが主宰する施設と付

近の山中の間を移動していた。自衛隊で隊内からの秘密漏えいを監視する情報保全隊も事実を把握し、調査している。

自衛官が、外部から戦闘行動の訓練を受けるのが明らかになるのは初めて」

あたかも大問題が発覚したかのようにみえる記事ですが、一体何が問題なのでしょう。実際の合宿の内容を紹介しながら、この記事を検証してみたいと思います。

素手で訓練する理由

この自衛官合宿は何も秘密裏に行っていたわけではなく、むすびの里のホームページで堂々と参加者を公募していたものです。ですから、「関係者の証言などで分かった」とする石井氏の書き方は、恣意的か全く情報収集していないかのどちらかです。さらに言うところ、自衛官が休みを惜しんで訓練し、地域の清掃奉仕活動もしてくれるということ、地元紙・吉野熊野新聞では好意的に紹介されています(平成三十一年一月八日付)。

そして現職自衛官に対して教えたのは銃器はおろか棒すらも使わない、素手での格闘です。

目的の一つには、自衛隊での訓練を補完する意味で個人格闘能力の向上もありますが、自衛官は部隊で集団行動をするわけですか

ら、そうした部隊としての戦術的要素も取り入れようと集団で格闘するという設定でした。

集まった自衛官は所属もさまざま、半分ほどは合宿に初参加でした。片方が守って片方が攻める設定で、まずチーム分けをして、双方がチームワークを確立して(チームビルド)、どうやって闘うかの計画を立て(プランニング)、そして実際に集団での徒手格闘(オペレーション)を始めるわけです。

まず施設の前庭で格闘の基礎的な訓練をしたのですが、川の対岸で石井記者がカメラを構えていたので、建物の裏手で訓練を実施しました。そこだけは当初予定を若干、変更したのですが、それ以降は予定通り、夜間の山中での集団格闘訓練などを実施しました。石井記者は明るい時間帯しかいませんでしたから当然、夜の部

あらや・たかし 昭和三十四年生まれ。東京理科大学を卒業後、陸上自衛隊に入り、特殊作戦群の初代群長に。退官後、明治神宮武道場「至誠館」館長を経て平成三十年、三重県熊野市に国際共生創成協会「むすびの里」を開設した。近著に「特殊部隊VS精鋭部隊」(二見龍氏との共著、並木書房)。

は取材していません。むすびの里の女性スタッフに対して、彼は「意外と姑息な隠蔽だ」「やましくないのなら堂々とやってほしい」などと文句を言っていたそうですが、当初予定通りに夜間、山中の訓練を実施しただけのことです。

こうした格闘訓練は、実際と同じ生の不整地で行うことに意味があります。やってみれば分かりませんが、畳の上でできていたことが少し足場の悪いところでは全然できなかつたりするからです。また夜間に訓練するのも同じ理由で、例えばかつて特殊作戦群が派遣されたイラクのサマワでも、宿営地が夜間を狙って攻撃されたりもしました。そうした状況に対処できるための当然の訓練、ということでしょうかありません。

なぜ素手での格闘訓練なのか、との疑問もあろうかと思えます。世界

休日に自腹でアメリカへ行っている人もいます。いずれも、私的な啓発活動であり違法性は全くありません。

私自身も特殊部隊を立ち上げるようになってからは、自衛隊の現況では特殊部隊としては能力的に不足があると考え、私費でアメリカのスクールに行ったものです。

共同通信の記事では「自衛官が外部から戦闘行動の訓練を受けるのが明らかになるのは初めて」となっていました。実際には慣例的と言っているほど当たり前に行われてきたことです。そして私的な時間を割いて自分の責務を果たそう、あるいは国民の負託に応えようという思いを實踐しているということは、私は敬意を表すべきことであると思うのです。

ですから今回の記事について、防衛省から何か言ってきたという

的にみても、最近の陸軍の任務の傾向は大火力で戦うものではなく、イラク復興支援活動のような社会的な活動が主流になってきています。そこで銃器に頼らない戦闘ということも視野に入ってくるわけです。

自衛隊の場合は日本の憲法や法律による制限もあるわけですが、その制限がない他国の軍隊の場合であっても、例えば社会復興支援の場面で押し寄せてきた群衆への対処となると、いきなり銃を撃つわけにはいきません。そのような状況では、素手で対処するしかない。そういう意味で徒手格闘の重要性が増しているのです。

能力向上の努力は当然

自衛官合宿は私が明治神宮に奉職していたときから十年以上にわたり、昨年末まで通算で十二回、

ことはありません。岸信夫防衛相が記者会見で「勤務外の私的な行動で、法的な問題がある行動とは考えていない」と述べていた通り、どこが問題なのか私には全く理解不能です。

自衛官が法律で禁止されているのは、職務上知り得た秘密の漏洩と政治活動への参加です。自衛官OBが現職自衛官に彼らが職務遂行上知るべきことを伝えることは秘密の漏洩には該当しません。また、格闘訓練は政治とは全く無関係です。

「安心できる危険人物」

共同通信の記事ではまた、私が「三島由紀夫が唱えた自衛隊を天皇の軍隊にする考え方に同調するなど保守的主張を繰り返しており、隊内への過激な政治思想の浸透を危惧する声も出ている」とさ

実施しています。もともと明治神宮の武道教室に来ていた現役の自衛官たちから「道場ではなく実際の環境下で訓練をしたい」との要望があり、東京・奥多摩の山中で年に一度、合宿を実施するようになったのです。

私が現役だったころ、私の知る限りでも多くの自衛官が外部の先生のもとで戦闘訓練を受けていました。また、自衛官OBを自衛隊に呼んで講習会を開くこともよくあることです。

自衛隊内では、部隊としての集団での訓練が主なので、個人の能力を向上させるための時間は意外と少ないのが実情です。そこで、個人の能力を高めたいとプライベートな時間を使って民間の道場などへ通う自衛官は多い。射撃については国内ではあまり実弾を撃てませんから、技能を高めるために

れていました。これについては、詳しく説明したいと思えます。

私が大学生のころ、三島由紀夫に啓発されていたというのは事実で、入隊して早々の二十代のころに一度、制服を着て「憂国忌」に行ったことがありました。そのときは情報保全隊の前身である調査隊の人に写真を撮られて、上官から「こういう催しには出ないほうがいい」と注意を受けました。

当時の私は、反戦自衛官の存在とか、左翼思想が持ち込まれることをチェックするのが調査隊の仕事だとはばかり思っていたので、憂国忌に出席して目を付けられたことには驚きました。自衛隊は、意外と保守的な考えに対しても警戒心が強いのです。かつて占領下で警察予備隊ができたときに米軍が、帝国陸軍の思想が持ち込まれることを非常に警戒していたわけ

で、その名残なのでしよう。自衛官が靖国神社に制服を着て行ったりするだけでも情報保全隊はチェックするのです。

それはともかく、三島由紀夫を偲ぶ憂国忌に出席すること自体は直接、政治的な活動には当たりません。ですから、そのことによつて処分を受けたことはありません。だから仮に、私が政治結社に参画したり、政治結社をつくっているとなればそれは問題でしようけれど、私はそんなことはしていません。

私は現職のときも、自分の思想信条については包み隠さず明かしていたので「お前、過激だな」と周囲に言われていましたし、憂国忌の一件で調査隊も気にはしていません。自衛隊の中では愛国心を表明すると、一般社会と同じように「右翼」だとか言われる

をつくらうとしているというのは読み手の極端な曲解です。

「武人 甦る三島由紀夫」(晋遊舎)というムック本に私の記事が載っていますが、インタビュアーの方が三島の精神を復活させたという立場の方で「何かできませんか」と聞かれたのに応じて、私は「楯の会」みたいなものを再生するとか、非武装の義勇軍みたいなものをつくるとか、そういう活動をあなた方がなさったらどうですか」という趣旨の話はしました。私が「楯の会」のような組織をつくるなどは一言も言っていませんし、つくるつもりも全くありません。

私が思想的に教えを受けたのは神社本庁の設立に尽力した葦津彦先生で、葦津さんから「三島も勉強したら」と言われて、三島の『文化防衛論』などは学生時代、

のです。しかし私は「なぜ自衛官が国を愛すると言つてはいけないのか」とか「靖国神社に参拝してはいけないのか」と個人の信条として言っていました。とはいえ自分の考えを他の自衛官に強要したりはせず、職務に専念していました。そういうわけで閑職に追われることもなく、特殊作戦群の初代群長を拝命したわけです。私は「安心できる危険人物」だったというのでしよう。

ところで退官後のことですが、平成二十三年一月の産経新聞で情報保全隊が、私や田母神俊雄元空幕長、佐藤正久参議院議員を監視対象にしているとの記事が載ったことがあります。このときは友部薫という方が情報保全隊司令(隊長)で、民主党政権下のことで、なぜこの三名が監視対象になるのか、例えば当時の防衛大臣の

愛読していました。しかし三島のように生きたいとか、三島のような行動をとりたい、ということとは全然違います。

そもそも、共同通信の記事にある「三島由紀夫が唱えた自衛隊を天皇の軍隊にする考え」ということと自体に間違いがあります。私の理解では三島由紀夫氏が言っているのは「天皇と軍隊を榮譽の絆でつないでおくこと(文化防衛論)」「天皇を中心とする日本の歴史・文化・伝統を守る建軍の本義に立ち返る(檄文)」です。これは、「自衛隊を天皇の軍隊にする」とか「天皇のための軍隊」という考へではないと思います。自衛官が生死にかかわる命令を受けたとき、肅々とその任務に邁進できる精神のよりどころとしての「榮譽の絆」であり「日本の歴史・文化・伝統」だと理解しています。

指示なのか、友部氏の個人的な判断なのか内情は知る由もありません。また、それが事実だとすれば、そのようなことを部外者に漏らした人物こそ秘密を漏洩した張本人ということになるでしょう。ともあれ一度、そういう「ブラックリスト」に載るとたいいていそのままになりますから、今でも情報保全隊は一応、私のことを注視はしていると思われます。ただ違法な活動をしているわけではありませんから、それ以降も私は自衛隊のいろいろな部隊で講演なども続けています。

「三島信奉」は曲解

共同通信の記事で「雑誌のインタビューなどで三島を信奉していると公言」していたと書かれていましたが、私が三島を信奉しているとか、「楯の会」のような組織

私がいれば公言しているのは、日本の歴史を振り返ると、明治時代に天皇が統帥権を持っていたのは特別なことではなく、それ以前の時代も例えば征夷大將軍なり執権なりに天皇が国家の軍権を与えているという歴史的慣習がずっとあった、それが戦後なくなってしまった、その空白をどう解消すべきなのか、ということだ。

他の国をみても、例えばイギリスやオーストラリアといった王室を有する国々においては、軍人のロイヤリティー(忠誠)の対象は女王陛下です。そうになると、現代の日本で空白となつている忠誠の対象を求めるとしたら、それはコロコロ代わる総理大臣ではなく、世俗を超越した天皇なのではないか。ただし軍隊の指揮権は総理大臣以下が持つべきである——というのが私の考えです。それは、先ほ

どの「武人 甦る三島由紀夫」のインタビュでも（統帥権と）指揮権は別です。指揮権は作戦上の合理的な指示ですから。指揮権は、組織的な軍隊の長（内閣総理大臣）に与えればよい」と答えています。

防衛力強化に敵愾心か

ところで石井記者の記事を読むと、自衛隊が強くなったら何か困るのか、と思わされます。私は今回の件を受けて彼の著書『自衛隊の闇組織 秘密情報部隊「別班」の正体』（講談社現代新書）などを読んでみました。防衛力強化に対する反発というか敵愾心が感じられます。

昨年末の自衛官合宿では、彼は川の対岸の民家の庭先で、土地の所有者には「風景写真を撮る」と説明して、ずっとこちらにカメラ

を向けていました。そこで合宿初日、むすびの里の女性スタッフが声を掛けたところ、彼は「共同の石井です」と名乗った。それで女性スタッフが「きちんと荒谷本人に話を聞いたほうがいいのでは」と持ちかけて、いったんは合宿最終日の訓練後に取材をお受けすることになったのです。もともと彼は、私に一切、話を聞かずに記事を書くつもりだったのかも知りません。

写真撮影については私自身は別に構わないのですが、参加者のプライバシーの問題もありますし、施設の露天風呂が丸見えになる場所でもあり、合宿二日目以降、女性スタッフが写真撮影について苦情を言いに行くと、石井記者は「取材妨害だ！ 警察に訴える！」などと怒鳴り始めたそうです。さらに「警視庁公安部や三重県警公

安課には連絡しました」とか「防衛大臣には会見質問通告しました」とか、法的措置もちらつかせての脅迫めいた言動があったので、おそらく直接会つても聞く耳を持たない方だろうと、合宿四日に女性スタッフから取材をお断りする旨を伝えたわけです。そうしたら彼はあっさりと言葉を返さず、記事では「荒谷氏は取材に応じなかった」と書いたのです。

私の考えを知りたいのであれば直接、取材すればいいのに、結局彼は私とは一言も話をしていません。私はここむすびの里に住んでいて逃げ隠れるわけでもなく、来るもの拒まずで、電話番号も公開しているんですけどね。

自衛官合宿では三島についての話などはしません。そもそも初参加の自衛官が半分ほどいますし、

もしかしたら情報保全隊の人がまぎれているかも知れません。

自衛官合宿について共同の記事によれば、私と参加者との関係が「三島と楯の会に酷似している」と指摘した防衛省幹部がいるそうです。しかし合宿参加者は毎年、固定しておらず、合宿の内容は自衛隊の精強化に資するためのものです。また、「むすびの里」からみると年間に二十件以上あるイベントの一つという位置づけです。

私にとっての国防とは

共同通信の記事が配信された後、いくつかのメディアから取材を受け、また私への取材なしに記事を書いたメディアもありました。その中には、私がクーデターでも起こすかのような印象を読者に与える記事もありました。

しかし私は今、むすびの里を開

設し、行き過ぎた自由競争社会に對して日本本来の共生・共助の社会を取り戻したい、という活動をしていて、それで手一杯です。

今回の報道ぶりを見るに、占領下にGHQによって作られた共同通信社の配信するニュースを全国の地方新聞がそのまま報道する構図が今なお続いていることや、日本を管理する上で都合の悪い情報発信源は大手メディアが共同して抹殺にかかるメカニズムなどが確認できました。私たちは、このようになお続く戦後体制の中で、日本の再興を果たさなくてはなりません。

私は出身地の秋田から荒谷家の墓をここへ移す準備もしましたし、熊野で骨を埋めるつもりです。この地域の休耕田を全部、元の田んぼに戻して、昔の共同体の風景を取り戻したい。これは何

年もかかることで、私が生きていくうちには終わらないでしょう。

でも、そういうことをやってくれる人が増えていけばいい。ここだけではなくて同じような活動を各地に広めて、日本の原風景を取り戻したい。

今の私にとっての国防とは、日本が日本であり続けるよう、日本の文化・慣習を守り抜くことです。日本の本来の姿を留めておくことが、民間人になった私ができる仕事だと思っています。



共同通信の石井暁編集委員は、正論編集部取材に対し「配信された記事の内容に関しては、書いていたことが全て。取材手法については違法性もなく一切、やましい点はない」と回答した。